



演技を終えた重本恵津子さんに、指導をつける蛭川幸雄。

47名の役者の卵たちの挑戦

## さいたまゴールド・シアター始動!

## SAITAMA GOLD THEATER



役柄にふさわしい座り方を、自らしてみせる蛭川幸雄。

3月に行われた「さいたまゴールド・シアター」のオーディションで、1,116名から選ばれたのは、当初の予定を大幅に上回る48名だった(1名はその後辞退)。レッスンは始まったのは、ゴールデンウィーク真っ最中の5月1日。以降、週5日、午前も午後も、55歳から80歳までの新入生たちは、顔を輝かせて、レッスンに取り組んでいる。

4月21日、彩の国さいたま芸術劇場は熱気に包まれていた。1月に発表されて以来、予想を遥かに上回る反響を呼んでいた、「さいたまゴールド・シアター」の団員が決定。そのお披露目記者会見が催されたのだ。48名の団員たちは、どの顔も晴れがましそうであると同時に、「なぜ、私が」といったとまどいも隠せない。あまりにも多くの応募があったうえ、3月に3週間にわたって行われたオーディションで、上手に演技するほかの参加者を目の当たりにし、「合格するのは宝くじに当たるようなもの」と、半ばあきらめていた人も少なくない。そこへ飛び込んできた朗報に、自然と意気が上がる。

「昔からある程度の歳の人だけで劇団をつくりたかった。生活者として生きてきた思いが演技にのせられるのではないかという思いがあります。僕と一緒に走りましょう」

同劇場の芸術監督であり、「さいたまゴールド・シアター」の発案者である蛭川幸雄の、記者会見での言葉に深くうなづく団員たち。レッスンの開始は、ゴールドという名にふさわしく(?)、ゴールデンウィークを返上して、5月1日から始められることとなった。



記者会見時の模様。新聞・雑誌のほか、テレビ取材も数多く、世間の関心の高さが伺われた。

photo:山下恒徳 取材・文:鴨澤章子

## “ありえたかもしれない自分”を探して

蛭川によるレッスン初日。団員たちにいきなり手渡されたのは、1冊の台本だった。『明日そこに花を挿そうよ』は'50年代の清水邦夫の作品だ。これは蛭川が演出家としてデビューした劇団現代人劇場で演出したこともあり、劇団青俳での初演では、自身も出演していたという、思い出深いもの。主役の男女は共にティーンエイジャーと若く、あえて年齢相応の作品は選ばなかった。

「演技というのは、“ありえたかもしれない私”と出会おうとするものなんだよ」(蛭川)

だから、過ぎ去ってしまった年齢でも、かえって自分の経験を踏まえ演じることができるというのが、蛭川の狙い。ある程度年齢を重ねた人なら、誰でも、あの時あашていれば、という思いをどこかで抱えているものだ。それを役を演じることを通して生き直せる、としたら、どんなに素敵なことだろう。

しかし団員たちには厳しい現実が控えていた。次回までに覚えてくるページ数も発表されると共に、相手役も自分で探し、交渉することが課せられたのだ。

「与えられるのを待っているだけではなく、自分で積極的に選ぶ。そのためには、本質を見るようになる。ここはカルチャーセンターではないのだから、そこから始めてもらいたい」(蛭川)

一見、厳しく映るこの方針、実は蛭川が思う最大限での相手を尊

重するやり方だ。普段、プロの役者たちと仕事をする場合は、こちらから役を割り当てるのが通常だが、人によっては蛭川より年上もいる団員たちの、長く人生を生きてきた目を信頼してもらいたい。

「初めから指示をすると、演出のクリエイションの中に、役者は生きようとするもので、それは避けたい」(蛭川)

団員たちは、早速、相手役探しにとりかかり、早くもすでにセリフあわせをしたり、レッスン後にも自主練習を始めるものも。

女性団員の中で最高齢の重本恵津子さん(80)は言う。「レッスン1日目、楽しかったです。とにかく、蛭川さんの最初のやり方がとても新鮮でよかった。いきなり台本を渡されましたけど、やっていけると思います」

## 47名の並々ならぬ思いがパワーに

蛭川の演出以外にも、各分野の一流の講師陣により、多彩で体系的なレッスンが組まれている。井上尊晶氏によりもうひとコマ演出のレッスンが持たれ、やまもとのりこ氏にはヴォイスを、桜井久直氏には身体の動かし方全般をムーブメントとして習うほか、広崎うらん氏はダンスを、花柳輔太郎氏は日本舞踊を担当している。これらのレッスンは、月曜から金曜までの週5日、午前と午後、1レッスンずつ行われている。その上、自主練習もしているのだから、体力的に大変なはずだが、団員たちはみな、日々を追うごとに元気になっていく。

「私はヘルパーをしていたので、腰痛を抱えていたのですけれど、そ